



第二十一卷 第四號

(通卷第八十四號) 昭和十一年十月發行

研 究

ボーリングブローク子と史學說

千代田 謙

一

文藝復興以來、啓蒙主義の時代を通じて、近世史學に於ける英國風と名づけらるべきものが、顯著に窺はれるやうになつたことは、とにかく、認め得られると思ふ。固よりその英國風と呼ばれたものも分析して行けば、特に別異獨自の要素から成るものではないかも知れぬ。けれども、既にさうした特性の存在を見出し得る限り、その特性そのものの把握と、その特性形成の過程の理解とを試みるこ

とは、必ずしも無用ではないであらう。而かも此の小篇は、かかる課題に對する全面的な解答を敢て企圖するものではない。唯その一契機を中心として若干の考察を行ひ、其處に幾分の見透しを贏ちえることを以て甘んずるに過ぎない。

二

文藝復興以降の英國史學史上、代表的史筆と目されるものの中、トマス・モアの「リチャード三世史」(Thomas More, 1478—1535.: History of King Richard III.)を別とするも、第十七世紀前半に於ける、ウォータ・ローリの「世界史」(Sir Walter Raleigh, c. 1552—1618.: The History of the World.)や、フランス・ヌイコンの「ヘンリ七世治世史」(Francis Bacon, 1561—1626.: History of the Reign of Henry VII.)や、更に同世紀後半に於ける克蘭ドン伯エドワード・ハイドの大作「英國革命史」(Edward Hyde, Earl of Clarendon, 1609—1674.: History of the Rebellion and Civil Wars in England.)などが、均しく時代の現實に活動せし實踐人の失脚・失意後の筆になれるは、一奇とも謂へよう。然るに第十八世紀後半、啓蒙主義の爛熟期となり、歴史敘述にも絢爛たる光彩を發揮するに及んでは、ダヴィッド・ヒュームの「英國史」(David Hume, 1711—1776.: History of England. 1754—63.)や、ウイリアム・ロビンソンの「蘇格蘭史」(William Robertson, 1721—1793.: History of Scotland. 1759.)その他や、或はエドワード・ギボンの「羅馬衰亡史」(Edward Gibbon, 1737—1794.: History of the Decline and Fall of

the Roman Empire. 1782—88.) など、何れも、前記第十七世紀の不遇政治家の回顧的筆録と異り、寧ろ叙上の作品によつて一躍讀書界・社交界の寵兒となつた趣がある。勿論、ペイコンにしても、ハイドにしても、一流の政治家であると共に、一流の思想家であり、教養人であつた、就中、ペイコンに於て著しい。またヒュームにしても、ロバートソンにしても、文筆・思想の天才であると共に、實務實地の能力に乏しくなかつた。而かも一度史筆を執るに當つて、その動機と目的とは、範疇を異にして考へねばならぬものがある。人は、第十七世紀の代表的英國史家を以て、實踐人生の諦視を獨白的に刻んだものと云ひ得るならば、第十八世紀の代表的英國史家を以て、行動人生の凝視を、廣く讀まれんがために彩つたものと爲し得るであらう。僅か二三の史家の事例によつて、時代の主流を測るは、少からぬ冒險であることを、忘れてはならない。けれども、知己を求める心から賣らんがための心への線は、微かな傾斜でしかないにしても、また、偶然の合致と謂ふべきものが多いにしても、認めざるを得ないであらう。現實の力の生への只管なる奉仕から少しづつ遠ざかつて、やはり實際的力的ではあるけれども、そこに美的教養的なる生の一面を展開しようとする、實踐的から觀念的への史筆の變化を、第十七世紀英國史風と第十八世紀英國史風との對照を明かにせんための背景中に、點出するは、一概に見當外れとは云へないのではあるまいか。換言すれば、廣義に於ける歴史學の、現實生に於て占める地位と性能とが、第十七世紀英國から第十八世紀英國への推移に於て、何等かの屈折

と度合とを以て、反映せられて居る點を、拾ひ上げることが出来ると思ふ。併し、それは、猶ほ、史學——極めて廣義に於ける——の學問的獨立への途を直指するものとは謂へない。なるほど、第十七世紀から第十八世紀への推移は、舊來の手工業的基礎上に限られては居るが、新しきマニユファクチュア化を蒙れる生産技術上の分業進展時代ではあつた、かかる時代相の視點より、人間心生活の成熟を認め、史學作業の専門化を、一般に學問の分化と同様、人智進歩の表現と見做すことも、必ずしも全く理由なきことではあるまい。確かに第十七世紀以來の史料學的考證研究の發達と、文藝復興以來の合理主義的にして而も經驗主義的なる精神活動の旺盛とは、學者の史的研究所をそれ自體として著しく推進せしめ、一般に史的理解を向上普及せしめる所があつた。一言にすれば、史學は大體に於て進みつつあり、自力を養ひ得つつあつた。されども、ヒュームやロバートソンやギボンの輝かしき文筆的成功は、殆ど全く第十八世紀の啓蒙文化に依存せるものであり、彼等の史學は、當時の享樂的有識階級を對象として醸し出されたものに外ならない。一方に大陸諸國、殊に佛蘭西等に對照顯著なる君主制國民國家の形成と統制とがあり、他方に宮廷文化尊重とは頗る異なる富裕市民の擡頭に伴ふ有識有閑群の目醒ましき進出があり、英國に於ける市民的社交的新教養の流行は、歴史敘述の専門化・文章化に對して、より激しき拍車を加へた。歴史敘述生産の動機・態度の角度からすれば、第十七世紀英國の國士的・政治的・力的なるものに卓越せる作品を出せるに對し、第十八世紀英國は、寧ろ社會的・

文化的・美的なるもの——用語に熟せぬ憾みはあるが、——に優秀なる作業を出して居る。蓋し、名譽革命を畔として國家的政治的經營中心の生活態度が一段落となり、産業的社會的文化的的生活が前景に立つに至りしことと合致するものがある。かかる地盤にあつて有識階級の幾分享樂的指導啓蒙を目標とせしところに、第十八世紀史學の第十七世紀史學に對する一つの出發點を求めることが出来る。唯この點だけを取れば、佛蘭西史學も相似たのである。併し、斷る迄もなく、この相似點の構造には、既に觸れる所もあつた如く、專制王朝的・宮廷貴族趣味的・佛蘭西風を多く編入して、同日に談せられぬ差異を含んで居るのである。

上述の如く、英國史風を第十七世紀と第十八世紀とを目標として相對せしめることは、固より、特性把握のために不可缺の手段として重んぜらるべきものであつて、而かも上に瞥見せし所は、その出發點たり背景たる史的作業の動機に關するものに止まつてゐた。以下茲に考察の中心對象としようとする、ポーリングブローク子爵、ヘンリ・セント・ジョン(Henry St. John, Viscount Bolingbroke: 1678—1751)の歴史論は、恰かも歴史叙述に於て、一般歐洲的にも、稍過渡的沈滯期とも見られなくはないところの、第十八世紀前半期の中頃に現れ、伊太利の哲學的史家ヴィコの力作「諸國民共通性の新科學原理」(G. B. Vico, 1668—1744: *Principi di una Scienza Nuova interno alla comune natura delle nazione*, 1725, 1730)や、佛蘭西の新文明史家モンテスキュウの名篇「羅馬人興亡原因考」(Montesquieu,

1689—1755: *Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence*. 1734.) 等と、略々時を同じくして、ものせられた。併しその成績は言ふ迄もなく、如上の傑作に追隨すべくもない。謂はゞ第十七世紀までの舊き史風に儻りなく、新境地の打開に惱みつつあつた第十八世紀初期の歐洲史界は、既に上掲の名篇力作によりて、同世紀後半の百花繚亂たる盛期を豫告しないわけはなかつたが、なほゾオルテールの「チャールス十二世史」(Voltaire, 1694—1778: *Histoire de Charles XII*, 1731.)にしても、舊套を脱却し切れぬものがあつて、概觀すれば一種の中間期と見られなくはないのである。英國に於ても事情亦然り、かかる時期に際し、一個の才人的政治家として策略縱横、遂に志を得ずして、英本國を追はれ、歎願して罪を許された後も、佛都に假寓して鬱を政論・史論にやりつゝ、猶ほも捲土重來を謀りつゞけたホーリングブローク子の所論は、その内容の一見陳腐凡庸なるにも拘らず、また史的作業として、上記の高大なる諸家に比すべき何物もなきにも拘らず、而かも最もよくこの中間期の空氣を反映代表せるものとして、史學史上、注目の價値を有たないではない。その歴史論の性質そのもの、その形成力としての人間生活、國際的交際、等々何れの點よりするも、中間的なるものとして、一方ならず、吾人の興味をそゝるものがある。(註二)

なほ茲に繰り返し注意すべきは、史學作業の地盤たり背景たる時代相の把握と、當該歴史叙述・歴史理論の内容・本質とは、勿論、相即不可分の發展關係にあるものではあるが、而かも亦、一面に於

て、混同を警戒し、肯定的相即關係と否定的相關々係とを辨別する所がなければならぬ點である。眞によく時代相の一例として取り扱ひ得れば、そのものの個性を明確にすることそれ以上に出るものはないであらうけれども、而かも亦、時代相の單なる一例とするに急で、そのもの自體の把握に漫然たるに墮する程、一面化することも少い。かくて今の場合、ボーリングブロークの全生活に就て、時代の現實生一般との相關々係を中心とする見地、史學史的地位よりする史的思想を中心とする見地、及び彼の思想行動の個人的性格把握を重點とする見地、の三つの目標を立てることは、最少限度に必要であらう。而してこれ等を統一する中心が史學史的立場よりする史的思想にあることは、本篇として、當然のことと云はねばならない。

さてボーリングブロークは、その「歴史學修論」[Lectures on the Study and Use of History, I.]に於て、歴史研究に入る動機を論じ、大體、次の如く分類した。(一)趣味本位の立場、カードを戦はせたり小説を讀んだりすると同じ興味からで、英國人に多いと云ふ。(二)博識を銜ふ立場、社交上教養の廣大を誇り、思想に獨創力なきを粉飾する類で、佛蘭西人に多いと云ふ。(三)辭書的編纂の立場、他人の求める史的知識を供給すべく、史料・史實の整理・考訂・解釋・編纂に努める、所謂文献學的博識蒐集派、併し唯考證編纂に没頭して、機智を働かせず、理性を用ひぬと云ふ。(四)上の考證家ほど便利ではないが、學者として遙かに尊敬されるもの、與へられ得る史實を縱横に統合し、想像し、推測し、

種々の作家の様々なる記述を連絡せしめ、起源不明の區々たる傳承を相關聯せしめる、眞の史家と云ふべき人々である。ホーリングブロークのこの分類は、更に二大別して、(一)(二)の所謂讀史的立場と、(三)(四)の所謂修史的立場とに纏めることが出来るが、とにかく、當時の歐洲史界の趨勢を、よく把へ得て居ると思はれる。翻つてみれば、かかる諸態度の並存は、殆ど何れの時代の史的作業にも見受けらるゝところであつて、文藝復興の伊太利に於けるペトラルカやボツカチオやビオンドやマキアヴェリやは、夫々上の分類の個々の一例となし得なくはない。併し、第十七世紀の考證學風の一大洗禮を経た第十八世紀、大規模なる新興教養階級を控へたる美的享樂的傾向は、文藝復興期のそれ等と相似たるものなしとせぬが、而かもマキアヴェリをして史的作業に奮起せしめたるとは又異りたる迫力を以て、ホーリングブロークを動かしたと云はねばなるまい。此處に啓蒙主義歴史哲學的新史風提唱の、史學史的必然性とも呼ぶべき道筋が見出される。

第十八世紀史學一般は、直ちに啓蒙史學の名によつて盡くされないかも知れない。そこにはホーリングブロークと共に右に見た如く、様々の流派・要素が舊態依然として存在して居る。併し、第十八世紀史學として、第十七世紀以前に對せしめるとき、その實體は、究竟、啓蒙史學として類型化せらるべき運命にある。啓蒙史學の最も包括的なる指標は、上記ホーリングブロークの分類せる四動機を悉く包含し、而かも第四の眞史學の立場を主體として統一することに外ならない。かく觀じ來れば、

文藝復興史學・宗教改革史學の概念に並ぶものとして啓蒙史學の概念を設定するとき、それは宗教改革史學によりも、文藝復興史學に似通ひたる點のより多きことに氣づくであらう。極めて大まかな言ひ表はし方であるが、そこには聖アウグスチヌス・ルテルの心情的・祈願的歴史理解の態度——宗教改革史學の本質は此處に求められる——は斥けられる。同時に又、人文主義史學——文藝復興史學の主力となつた——の一面なる美的裝飾的行き方も、斥けられる。然らば、マキアヴェリこそ再興せらるべきではないか。人は、今や一個のマキアヴェリが、啓蒙史學の幾多の代表者等に、千々に碎けしその片影を投じたと形容することを許さるゝではあるまいか。さうは云つても、ポリングブロークが、マキアヴェリを意識的に如何程學んだか、無意識的に如何程影響せられたか、それを當面の問題とするわけではない。かかる點からすれば、寧ろ數多の古典作家、就中キケロ・ホラチウス等のストア的思想文章を先づ擧ぐべきであらう。唯、時代の史學を形成する、その運命の性格に一種の類型を認めざるを得ぬ次第に外ならぬのである。而してかかる意味に於けるマキアヴェリ的な本質こそ英國に於て最も顯著に窺ひ得られるではあるまいか。啓蒙主義の苗床が英國であり、英國風の色彩が啓蒙主義に混ざること多きは、普ねく人の認めるところ、而してポリングブロークは、小型ではあつたかも知れぬが、その最も典型的なるものに違ひなかつた。

(註一) R. Mayr, Die philosophische Geschichtsauffassung der Neuzeit, 1877, S. 130. ポリングブロークを指して、啓蒙主義と

歴史とを初めて結合した者となし、ザアルテールもモンテスキエウもこの結合から生まれ出た産子だといふ。

(註二) 本篇は、拙著「近世史學史序說」と多くの點に於て、密接なる關係をもつ。

三

周知の如く、第十七世紀の末葉から、第十八世紀前半に亙る略々一世紀間の英國は、その諸般の生活に於て、漸次興隆の軌道に乗りつつ、而かも少からず動搖を續けた時代であつた。その根柢には、生産・通商の促進、立憲議會制度確立等、經濟的・政治的前進を着々抄らせつつ、而かもその表層には、多くの競合・興奮の渦を浪立たせつつあつた。人が、ロレンツォ・メヂチ治下のフロレンスを連想したり、君主・貴族・民主三政體合成組織の理想實現を古羅馬に比して賞讚したりした所以であり、政論旺盛なる言論の時代であり、而かも漫筆流行チツギの不滿の時代であつた。内的革命は、スチユアート殘黨の蠢動にも拘らず、ホイッグ・トーリ兩政黨の黨争激化にも拘らず、次第に遠ざかり行き、寧ろ對外抗争を前景に立て植民帝國の實現に邁進し、漸く佛蘭西を壓倒するを得た時代であつた。

後のボーリンググブローク子なるヘンリ・セント・ジョン(註一)が、恐らく享樂的現實的なりし父の血を多分に享けて生れた一六七八年は、佛國の太陽王ルイ十四世の極盛期、かの和蘭侵略戦争の終結ナイメーヘン和議開始の年であり、スピノーザ病歿の翌年に當る。此の佛王の世界政策に脅威を蒙つてゐた英國では、カトリック的・親佛的・スチユアート王に慊らず、議會は頻りにチャールス二世と衝突し、王

位繼承問題がヨーク公を中心にして、ホイッグ・トーリ兩黨の旗幟を明瞭ならしめつつあつた。ジェームス二世の登位、その不評なるカトリック愛護、親佛的中立外交、聽て一六八八年の名譽革命等は、ヘンリがなほ十歳未滿の少年時代の出來事であつた。彼が夙に修學時代より、後年の政敵ウォルポール (Walpole, Sir Robert, Earl of Oxford, 1676—1745.) と相識りしは一話柄であるが、才氣煥發なる彼は、ドライデン (John Dryden, 1631—1700.) 等とも親交あり、二十歳を過ぎるや大陸に遊び、巴里風の才人となり、文學に手を染め、放縱。その後、新妻の嫁資に父の遺産を加へ、一七〇一年には國會に議席をもち、聽てトーリ黨に籍を置き、ホイッグに入りしウォルポールより一足先きに華かなる政界の闘士となつた。兩政黨は、均しく新興市民の利益を代表するものであつたが、而かも次第に、より地主・僧侶的利害に敏感なるトーリと、商工業家的損益に動かさるゝホイッグとの對立は、政權を中心にして深刻化し、その焦點を、一七〇〇年七月の「踐祚令」(Act of Settlement.)——結局は神權説の全面的拒否、ハノヅア家迎立に歸する——及び歐洲均勢主義外交原則——ウィリアム三世の對佛大同盟の包圍政策による主戰的積極的國策——の二問題の可否に見出した。ホイッグは、舊教派スチュアートの登位阻止・打倒佛蘭西の尖鋭なる主張によつて、輿論をリードし、トーリ陣營は動搖する。一方、かねて歐洲政策を敢行しつゝありしルイ十四世は、佛蘭西の財政的・國際政局的頽勢を一舉に轉じて世界制覇を確保すべく、掉尾の勇を鼓して、西班牙王位繼承戰爭に蔘進し、その常套手段たるスコット

ランド攪亂、英王・英議會交互操縱の政策を推進し、一七〇一年には、庇護下に歿せし廢王ジェームス二世の子ジェームス覬覦者 (James Edward, the Old Pretender, 1688—1766) 援助を公言して、議會派英國に挑戰。他方、英・埃・和蘭等を大同盟せしめた排佛派の首謀ウィリアム三世は、その翌年落馬によつて歿し、アン女王即位。かくてマールボロ公 (John Churchill, Duke of Marlborough, 1650—1722) の擡頭となり、その聯立内閣は、「政黨政府にあらざして烏合の政府」に過ぎなかつたにしても、とにかく、一七〇四年から一七一〇年に互り、大體反佛積極政策を標榜し、その間、青年政治家セント・ジョンをして軍部の椅子により活動するの舞臺を準備したのである。彼は次第に後のオクヌフォード卿ハリー (Robert Harley, Earl of Oxford, 1661—1724) と近づき、マールボロ公より遠ざかり、一七〇八年にはハリーと連袂野に下つたが、當時漸く飽かれたるマールボロの主戰的積極方針に代つて、ハリーの平和主義内閣成るや、セント・ジョンは入つて樞密顧問官並びに國務卿となり、佛國との單獨講和を畫策する。けれども、事毎に因循姑息の風ありしハリーとは、何時しか相合はず、名譽革命以前のトリー華かなりし昔に返すべく積極的策動に奔走する。一七一一年の英佛講和運動以來、一七二三年ユトレヒト條約成立に於ける彼の外交上活躍は、頗る目覺ましいものがあつたが、それは彼自身冷嘲的に表明せる如く、政權維持を目的とする政黨的利益が、引いて英國及び歐洲一般の幸福に背馳せざるためであつたと云ふべく、殊にこの條約が英國の植民帝國・商業帝國大成の路上に、とにかく

一箇の礎石を加へたことは認めてよからうと思はれる。併し、當時非難反對の聲を大にした者も、政敵ウォルポール始め、決して尠くなかつた。同盟の誼を破る不信を敢てして締結された不名譽なる條約は、結局、西班牙の王冠をブルボン家に委ね、十二箇年の惡戰苦闘を徒らにして、和蘭・英國新教徒を生殺しにしてしまつたと云ふのであつた。

かくて女王アンの晩年には、トリー黨内諸派に分れ、王位問題からみると、ジェームス黨(Jacobite)・ハノヴァ派・中立派等があつたが、ボーリングブロークは、ハリー排斥の駈引からも、ブリテン覬覦者ジェームスに近づき、後にはジェームス黨の一員に屬した程だ。併し、彼の鋭い合理的智的傾向と常識的功利的性行とは、信仰的な神權説の形而上學的理論によつて左右せられるものではなかつた。彼の思想の基礎は、寧ろジョン・ロック的契約説的民主的傾向を含む國王及び議會中心主義に向ふものと云ふべきであつた。彼は女王の歿前に、ホイッグ黨を全く政權より遮斷し、己のトリー主義によつて地主と教會との利權擁護を確立すべく策動に力め、ハリーは遂に退けられ、彼は之に代つたが、ジェームスを新王に擁立の計畫中女王は急逝し、而かもその直前に於けるホイッグ黨の運動奏功せるものの如く、ハノヴァ家のジョージ一世が五十五歳にして踐祚。茲にボーリングブロークの企圖は頓挫した。これより前後四十年に亙るホイッグ黨の天下が開け、ウォルポールの商人的買收政策は、とにかく、一方に新興實業資本家等の支持を得、他方に地主僧侶等の反對勢力を懷柔し、後には外柔内剛の貶りを蒙るに

至りしも、當分は不動の優位を獲得したのである。すなはち、ボーリングブロークは、一七一五年、巴里に逃れ、社交界に持囃されたが、覬覦者ジェームスとも意見合はず、その中その大なる黒幕たりしルイ十四世他界するや、元來、主義・理想の堅持より投合せしものではなかつたし、面白からぬにつれて、ジェームス黨とも相疎むに至つた。

若きヴォルテールが彼れを訪れて大に感服したのは、^(註二)ボーリングブロークが先夫人を失ひ、ド・ヴィ

レット公爵夫人 (Marquise de Villedé) とオルレアンのラ・スールス (La Source) に寓居せる一七一九・二〇年の頃のことであつた。當時、アラリ (Alary, Pierre Joseph, 1689—1770.) や レンヅェク・ド・フィイ (Lévesque de Pouilly, 1691—1750.) 等の史的作業を通して、讀史・研究に沈潜し、聖書年代の考證等にも觸れたりした。恐らく一七一八年前後に草せられた「ド・フィイ氏に與ふ」(Lettres to M. de Pouilly.) や、「テイロツソン大監督の説教に就つ」(A Letter occasioned by One of Archbishop Tillotson's Sermons.) の如き、前者は、當時一部に流行せし、餘りにも「理由なき懷疑」を批判し、後者は又、極端に「理由なき盲信」を戒しめたものとして、彼の史的關心の一端を示すものである。史的認識の信憑性を、疑はんがために疑ふが如き、破壊的なる否定は、何事をもその儘有難く輕信する盲從的肯定と共に、理性ある啓蒙人には、認めらるべくもない。ボーリングブロークは、多くの政治論に筆を染めて、^(註三)時に、混合政體主義・均勢主義を根柢とする學國的協力聯立内閣を唱道したりして、政敵ウォルボー

ルに接近を試みたこともあるが、結局反撥し、ポーン (Alexander Pope, 1688—1744)、「メキント (Jonathan Swift, 1667—1745) 等と交つて政府攻撃の運動を續け、「ザ・クラフトマン」, "The Craftsman" 紙に筆陣を張つた。彼の歴史觀は、かくの如き政治論と相糾へるものなることは、云ふ迄もない所であるけれども、見落してはならない點である。かかる間にその史的思想は益々濃度を増し、歐洲史概論をものしようとの興味を懷くに至つたやうである。

ホイッグの天下を覆へす方なく、佛蘭西に引退し、而も依然として政治問題に手を伸ばし、機を窺ひつつあつた一七三五年頃に書かれたる「歴史學習論」(Letters on the Study of History) は、既に觸れた如く、このボーリングブロークの史的思想の結晶である。彼の現實生活が、常に環境と目的と方法との結合を重んじ、所謂臨機應變、時に豹變、見方によればそこに何等の節操なく、精神なく、唯名利のため黨利のため、一介の策士として只管機會主義的に狂奔して止まる所なかつたと解さるるは、確かに中らざるものではないであらう。彼の政治上の主張や政策も、大體に於て地主的トリー主義と名づけ得られるとは云へ、その内容は頗る變化に富んで居る。例へば「踐祚令」の可否にしても、初めはその存續を認め、後には廢止を主張したるが如き、政黨政府についても、在朝時には分離獨立の政黨主義を唱へ、在野時には舉國超然の非政黨主義を可としたるが如き、對外政策でも平和維持主義より海上積極主義に轉じたるが如き等、一七三八年以降は度々歸英して、ウェールズの宮フレデリ

ツクに近づき、後のジョージ三世の教育に影響を與へたが如き行動に相應するものといつてよい。かかる現實の經驗の導くまゝに動いて止まぬ現在主義・功利主義的の行き方は、彼の思想・文章・辯論・何れもその當時に於てこそ、賞讃され持囃され有效であつたが、時の經つにつれ、餘りにもその賑かさの後に來る寂寥と忘却との甚しさを歎せしめるものあることも相通するかの如くである。彼が畫策し、策動する手腕は畏るべきものありしにも拘らず、つねに今一步といふところで失敗したのは、所謂運命的なる成行であつて、彼の性行に誠實心の缺除せる事實のみが、その責に任すべきではないであらう。ボーリングブローックを以て、一箇淺薄輕浮なる政客に過ぎずとし、その思想文章の基調また低俗、掬すべき雅味風格に乏しとするも、唯、此の期英國の歴史的なる類型性理解の鍵としては、好箇の實例たるを失はない。まことに彼は徹頭徹尾現在人に終始したと謂ふべきであらう。

(註一) 此處に主に據つた傳記は、Walker Sichel, *Bolingbroke and his Times*, 1902. A. Hassall, *Viscount Bolingbroke*, 1889 及び Motley, *Works*, vol. XIII. 等、Collins のものを見るべし。

(註二) G. Brandes, *Voltaire und sein Jahrhundert*. Bd. I. S. 97.

(註三) 例へば初期に *Reflections on Exile*, 1716. Letter to Sir William Wyndham, 1717. 等々、その後「マラントーン紙」に、*Remarks on the History of England*, 1730. Three Letters on the History of Athens, 1732. 及び *True Use of Retirement*, *Patriot King*, 1739. *The Spirit of Patriotism*. *The State of Parties at the Accession of George I.* 等々多數あり、*Some Reflexions on the Present State of the Nation*. 以上未完に終つた。書翰も多し。

四

ホーリングブロークは嘗て云つた、「愚鈍は伶俐・狡猾に如かず、狡猾は叡智に如かぬ。叡智も狡猾も時に同一の目的に向ふことが少くないが、併し賢人はその眼界がより遠く、より大きい。……叡智も狡猾も亦時に同一の手段を用ひることがある。併し賢人は、方便として驅使するのだが、凡人はそれ等の方便に驅使せられるのだ。」(On the Idea of a Patriot King.) 我等はここに彼が人の才識を如何に考へ、やがては認識と行動とを如何に把握したかを想見すべき一箇の足場を見出すことが出来ると思ふ。すなはち、第一に人は認識をもたねばならぬ、けれども、第二に認識は相對的なるを脱しない、そして、第三にそれは實踐から游離してはならない。これが自我に即する智のはたきなのである。それ故、譬へば恰かも暗夜に燈火を點するが如しと云つてもよからう。究極の本體を假定し、若くは合理的に一切を究明し盡くすといふが如きは、人間の越權である。現實の生が刻々に展開する具體的なる經驗こそ、外ならぬ眞理の場なのだ。故に曰く「一切の科學は、それが眞實のものなる限り、下から起り來らねばならぬ。即ち我々自身の水準から起り來らねばならぬ。存在の眞理は、知識の眞理だ。」かくて日常の常識的なる經驗的事實こそ、人生學の最も自明確實なる素材として、虚心坦懷に受け容れられねばならない。處世の要諦を悟り來れば、やはり花紅柳綠、所謂向ふ三軒兩隣のその儘が、社會人生そのものなのである。形而上學や神學は、この分析すべからざる直接的經驗を抽象し游離せ

しめ、第一原因とか究竟實在とかを超驗的に假定する所に、その誤謬の發端をもつ。此の混沌たる世界は、不可測の暗黒にも比すべく、到底、我等の力を以て點する燈火では明めつくすことが出来ないであらう。此の生の無際涯なる千變萬化を、我等の力によつて、能く整理し切ると言ひ得る者があらうか。ボーリングブロークは、かかる點に於て、甚だ漠然とではあるが、不可知論的立場をとると云へよう。只わが智性の燈火を、より大きく點じ、より高く掲げて、わが行く路を出来るだけ確かに、出来るだけ遠く照らし出すのみ。賢者は小才子に比して遙かに明かに照らして、遙かに遠く遙かに高く、誤りなき道を進むであらう。かかる意味に於て、それは必ずしも徹底的自覺的とは云へぬにしても、ボーリングブロークは、人間理性の力を信ずることが出来たのである。實にかくの如く觀じ、かくの如く行せしめる人間理性のはたつきこそ、認識と行動との正當なる主體であらねばならない。「主義や規則や習慣や計畫や偶然や無智や利害やの權威」を迷信し、偶像化して、睿智の無礙なるはたらきを膠着せしめることの如何ばかり多きぞ。「凡て人間の設けた制度には、不思議に人間理性を信賴せぬといふ傾向がある。かかる不信用は、我々が、種々な權威に習慣的に服従するやう、襦袢の中から仕向けられたので、相當根強いものになつたのである。」(True Use of Retirement and Stud-

い)とせば、經驗の死藏は——知識の固定的蓄積は、却て人間理性の明鏡を曇らし、生の自在なる發揮を妨碍する。筋肉の極端なる發達が却て内臟諸器管を壓迫するかの如く、營養の過度が却つて自家中

毒の症狀を呈するかの如く、そこに中庸と平均との健全性を重んぜざるを得ないものがある。思ふに彼の均勢主義は單に歐州外交上の原則たるに止まらず、又英國政體の理想たるに止まらない。それは彼のストア的自然の理法、理神論ダイスム的世界の理法に通ずるものであつたが、隨つてその一端は、當然、認識と行動との問題にも脈打つてゐるといふべきである。凡て絶對的なる權威や理想や超越的なる根據や形式を、固定的に墨守するのが、眞理を晦ます所以であるから、政治に於ても、諸の勢力の對立均衡に於てこそ眞の安定と健全性が保たれる。立法・執行等の權が、絶對的に國王の掌中に握らるる專制君主政體も、貴族の支配に任せる貴族政治も、人民に壟斷さるる民主政體も、何れも一面に偏し拘泥せるものであつて、生々自由なる本然の健全さではない。これ等三者の均勢裡に、謂はゞ動中の靜として出現する立憲君主議會制こそ、最も自在にして安定せるものに外ならぬ。「わが國の如き憲法に於ては、全體の安全は、各部分の均勢に依存し、各部分の均衡は、それ等相互の自主獨立性に依存する。」(Remarks on the History of England) さればホーリングブロークは、宗教的見解に於ても、また、唯物的宿命論に奔るでもなければ、攝理萬能主義に歸依するでもない。「人に與へられたる二大特典は、自然の理性と超自然の啓示とである。」隨つて、聖パウロの絶對化は、プラトンの偶像化と同様に、斥けられねばならない。信も淫すれば迷信に外ならず、泥めば盲信に墮するのである。こゝに彼の一貫せる自我の統御力即ち理性のはたらき、に據る批判的態度が醒め、自然神教ダイスム信奉の據所が求

められる。それはこの期の契約說的民權尊重の個人主義思潮と軌を一にするものである。生の積極的方面——生本來の面目は、かく流通無礙、自由自在なるものとして、我等の經驗に現象する。去る者を追はず、來る者を拒まぬ、日日これ好日と云つたやうな、囚はれぬ境涯を自我の内容となしてこそ、宇宙の自在振りに徹底する。併しその自由自在は、無我的・否定的の空なるものではない。飽く迄、「我」に即し「個」を離れぬ。かかる意味で、凡ては相對的であり、最善は中庸であり、真相は調和である。人は之を「自然」と呼ぶ。自然の光なる人間理性は、この意味に於て、天地萬物の理法を明かにする燈明である。「例へば自然宗教の一般的法則や、社會の一般規則、及び善き政策の一般的準則といふが如き、多くの問題について、邦を異にし言語を異にする總ての人々と雖も、その理性の涵養に力めるとき、同じ様な判断に達するのである。」されば又、「自然と眞理とは、到る處同一である。そして理性はこれ等兩者を到る處同様に提示する。」(True Use of Retirement and Study.)

ボーリングブロークの目指せる學問は、既に觸れた如く、政治と歴史とを中心にする實踐の學であり、行動と功利とを生かすはたらきの意味に於ける修身の學である。かかる極めて通俗なる色彩に富む人生哲學であり、時に屢々賢明なる處生法の探求である。「各人の理性こそ、各人の神示オリエンタルなれ。この神託は、遁世の靜寂に於てこそ最もよく參考せられる。」ここに活動と靜思との相關々係が考へられる。行住坐臥つねに理性は、たらい、て居ねばならぬが、時に靜觀冥想の必要なるは、晝に對する夜の

如く凡ての事を誤まらざるために、缺くべからざる肝要事である。人は、ポーリングブロークが、失脚引退の負け惜しみに、かくもつともらしく静思の徳を考へたと云ひ得るかも知れない。併し、負け惜しみと見ることが全部をつくすか否か、速断は、慎しまねばなるまい。彼はかく省慮したとしても、胸中の鬱塊憂悶を解消し盡くすことをなし得なかつたかも知れない。併し、恐らく彼自身の痛手を癒やし忘れる上に少くも一助となつた點は、認めて差支ないであらう。彼は述べてゐる、「心を享樂に酔ひ痴らしめたり、長き時間の経過に待つたりして、苦惱を醫するのが人類大多數のやり方だ。併し、前者は僅かに一時を糊塗し、後者は奏功頗る緩漫であつて、共に賢人に適はしからぬ方法である。『苦痛を覚えぬやうに忘れしめることは、苦患そのものを根治することではない。セネカの言つたやうに過・現のあらゆる苦惱を満喫正視して、『それ等に打ち克つべく、それ等を逃避することをやめようではないか。長い苦しい忍耐によつて、不幸の感覺を銷磨し盡くしてしまはうではないか。樂にする療法をやめて、切開ナイフや腐蝕劑を用ひて、傷口を徹底的に探ぐり、直接一氣呵成の荒療治を行はうではないか。』(Reflexions upon Exile)彼の靜觀尊重には、かく彼の現實なる悲痛憤懣の鎮靜への途が根柢となり、人生の荒浪に善處して屈せざる諦觀への望みが基調となつてゐて、同時にそれが歴史感の母胎をなす。而かもそれは、己の無力を反省するよりも、寧ろ自力更生を期する積極的自我肯定の地盤に立つものである。全宇宙は不斷の旋轉(a continual rotation)を現じ、自然はそこにその本然の姿

を示すが如くである。人心も亦、かかる自然の動搖 (a natural restlessness) を呈する。諸民族の移動・興亡止まるなきも、これに由る。「かくて運命は、何ものも長く同一の状態に留まらしめぬやうに定まつてゐる。」これ等の思想は、マキアヴェリにも、ヴァザリにも、ジャン・ボダンにも、既に幾度か繰り返し考へられて來たもので、盛衰觀には古來殆んど例外なきつきものといふ外ない。民族の流動も個人の流浪も、畢竟は、かかる自然の規によるのだ。而かもポーリングブローックは、かうした自然の道理の靜觀だけに止まることに甘んずるものにあらざること、既に度々觸れた通りである。或は、彼の如く俗臭紛々たる名利の才子に、深き靜觀自得の境涯は求むべくもない、己の行藏を粉飾する皮相の美辭のみと貶することも、穿てる一面をもつと考へられる。けれども彼が眞面目くさつて次の如く説くをみると、我等は、その自己辯護の色彩を意識しつゝ、なほ一代の成金が論語を説くに似たる眞摯さを認めることが出來ると共に、靜思と活動との相關々係の活用に一種の滋味をさへ味得しつゝある彼を窺ふことが出來るやうに思ふ。「モンテイヌがその隨想録エッセイを書くに當つても、デカルトが新しき世界を建設するに際しても、バーネットが前代の世界を構想するに於ても、否、ニュウトンが實驗並びに高遠な幾何學によつて自然の眞法則を發見樹立するに就いてさへ、到底、眞實の愛國者が、その全智力を擧げて、己が祖國の善福のために、己が思想行動悉くを傾注する場合の、あの智的喜悅に勝ざるものを、感ずることは出來ない。かくの如き愛國者が、政治上の企畫をなし、様々の一見何

等の關係も有たぬやうな、それでゐて實は一大有意義なる計畫の、不可分の部分たる處方を講ずるといふ時には、多大の勞苦と而かもそれに劣らざる多大の興味とを以て、想像の翼に乗じ冥想の淵に没するのである。これ等輕重種々の畫策より生じ來る満足は、かかる設計描畫の一步々々に於て、尠からず鼓舞促進の役割を果たす。以上が思索的哲學者の勞苦と喜悅との限界なのだ。併し、實踐行動のためにはこそ沈思する人は、更に進んで彼の企畫を實現成就せねば止まぬ。彼の勞苦は猶ほも繼續し、變化し、増大する。而かも悅樂また之に伴ふ。實行は、途上屢々豫期せぬ突發事件により、味方の不誠・裏切りにより、敵手の權力・惡意により、妨碍を蒙ることが尠くない。併しまた、事の初めと終りとは、〔着手の意氣込みと成就の期待とによつて〕奮起の心を促し、或は若干の人々の柔順忠實が、他の人々の邪惡不信を補つてくれる。大事猶ほ決定せざるに當つては、行動は熱し、未決定その事が希望と不安とを凌り、心に必ずしも不快ならぬ動搖を持續せしめる、……」(On the Spirit of Patriotism)。

ボーリングブロックの靜思と行動・認識と實踐との不即不離なる扱ひ方は、上述の如く何時しか行動實踐をそのアルファとしオメガとする性質のものである。まことに此の思と行、理論と實際との轉換點に實踐的に立つ學問こそ哲學であり、道德學であり、纏て就中最も歴史であるのであつた。

(註)

ボーリングブロックの認識に關する反省、殊に歴史の概念の不整不統一と、淺薄・不明瞭とを指摘したもの、一例を「See

phen, History of English Thought in the Eighteenth Century, vol. II, p. 173 ff. に見る」ことが出来る。一般に彼の思想の

皮相淺薄なる旨は、定説的に扱はれる所であるが、Stephen はモンテスキュウの名を引合に出して、これとは比すべくもな
いとて、結局、ボーリングブロークは學的にあらすして、舊式外交の狡猾な術に終始する者に過ぎぬとなしてゐる。

五

「歴史は實例によつて教へる哲學である。」ボーリングブロークも亦かく主張する。そして「歴史愛好は人性につきものである。」と云ふ。「蓋しそは自愛(自愛)の故に、蓋しそは自愛(自愛)につきものだから。」この言葉によつても推察される如く、彼の人生は「我」の現前に終始するものといふことが出来る。均勢の原理といふも、囚はれざる自在境といふも、何れも「個我」に即してのことである。この一個の我なくして、何の世界ぞ、何の自然ぞ、何の理性ぞ。此の我あるが故に、人は未來を慮り、過去を温ねる。歴史の存在する所以である。自我を通しての社會であり、國家であり、自我を通しての道德であり、歴史である。自我は經驗の生きたる統一に外ならない。歴史は最も經驗の學である。歴史を實例による哲學となしたボーリングブロークは、「實例の道場は此の世間であり、此の道場の主人こそ歴史であり、經驗である。」と云ふ。彼が羅馬人はその天稟(Genius)を經驗(experience)と修學(study)によつて助長したといふ時、その「經驗」は實踐體驗を意味し、その「修學」は理論工夫に歸入するものと解してよからう。歴史を經驗の學となすはより理論的なる學と區別し、人生の行動・體驗に即する學となす所以と考へられる。「實例の哲學」たる意味もここにある。「人心の性癖は形成せられるものであり、考へ方もそれ

に或る程度規定せられる」のであつて、天稟を全く變改することは出来ないとしても、道德的實踐は、之に多少の變更を加へ得ると考へてよい。「實例」の意味は、かくて理智(Understanding)と情意(Passion)との兩面をもつと云ひ得る。併し、ボーリングブロークの主とせしは、理智の側面であつた。彼の態度は一般に人生の權力的・現實的・打算的なる側面に注目するものであつて、内面的・心情的側面は等閑視せられる嫌ひがある。行動的經驗もかかる功利的色彩に染まつて居る。随つて歴史も亦、かやうな立場から主智的に解された。すなはち謂はゞ藝術ではない、美的鑑賞に終るものではない。加之、歴史は實踐體驗に即するものではあるが、行動そのものではない。それは認識であり、學問である。實踐と區別せられて、理論的なる地盤に立たねばならぬ、すなはち「實例の哲學」なのである。かくて歴史は實地の經驗に最も近きものではあるが、それとは區別せらるべきである。此處にまた先人の口吻を以て歴史の「利益」が二重だと云ふ所以がある。實踐と理論との一石二鳥式收獲が得られるといふ(註)のである。(Letters on the Study of History, Letter II. 以下單に Letter と略す)。

されば、歴史の研究は、教育に於て極めて肝要なる位置を占める。人間の一般性格は天性により、特殊行爲は直接の對象によるとしても、盲目的衝動の生と統制された理性的生との區別は認めねばなるまい。自然必然的生と自由意志的生と言ひ換へてもよい。既に「實例」を認めるならば、「教育」を重んずるのであり、それは理性の自由を、ともかくにも豫定して居るのである。もつとも、その理性の

自由は、環境的必然と、均勢的中庸を保つて居るに違ひない。さて、ボーリングブローックの「教育」(education)は、特に「道徳的性格を形成するに役立つその部分、その最も主要にして而かも最も等閑視される部分」を指すのであつて、「人間をその若年よりして訓戒・範例・論議・權威等によつて導きそれ等の規を實行し、又實行する習慣に迄達せしめるやうに工夫された制度」だと云ふ。而してかかる教育の効果を認めぬ輩は、固より云ふに足りぬが、苟も教育を尊重する程の人ならば、「勿論、歴史の學修が、道徳的性格形成又は吾人の人物養成に對して致す役割の重大さを、余と均しく認容せずにはゐないのである。」究竟するに、歴史教育の眼目は、人物養成の中樞たるべきである。「歴史の研究が、吾人を一層賢明ならしめ、一層有爲の市民たらしめ、同様に一層善美なる人物たらしめることなくしては、その利は云ふに足りぬ。單なる古物愛玩者や學究や乃至は氣取屋や冗舌の術學者をつくることが、固より既に觸れた如く、ないわけではない。併し、之は歴史〔そのもの〕の罪ではない。」(Letter III.)。

歴史の教育は、實例の教育なるが故に、架空の事例は斥けられねばならぬ。「歴史は或る度のあり得べき性質と信じ得べき性質とを保有せねばならぬ。然らざればその中に見出さるゝ實例は、吾人の心に正當なる印象を與へるに足る力なく、又、哲學の教訓や善き政策の規準を究明し強める力がない。」既に觀る所ありしが如く、此の客觀的史實認識の可能性についても、ボーリングブローックは、その中

庸主義に於て、輕信を斥けると共に、極端な否定をも排した。「それ故、余は、歴史が何れの時代に於ても、故意に且つ組織的に歪曲されて居ることを認める。そして黨派心や先入主が、度々或は意識的または無意識的誤謬を、最善の歴史叙述に於てさへ、招來して居ることを認めるのである。」けれども、「何等か虚偽を有たぬ歴史がなく、誤謬を含まぬ歴史がないとの故を以て、歴史の事柄について、一般的なる否定的懷疑主義(Pyrrhonism)を打ち建てようとする愚かさ」は徹底的に排撃せねばならない。今日では古今の史料文獻が著しく整理せられ豊富となり、正確な史實の連鎖を期待し得るに至り、比較的容易に合理的解釋を加へ得るに至つたので、歴史知識の蓋然性・信馮性・統一性は疑ふべくもなく確保せられ増大したのである。(Letter IV.)

併し乍ら、右の史實認識に竄入する主觀性・歪曲性・過誤性の外に、不可避的であり且つ正當なる主觀性と偏向性との存在を見逃すわけに行かなかつた。曰く「されど又、歴史にして、かかる必須不可缺なる信馮性と蓋然性とを有するとしても、なほその外に、多大の眼識をはたらかして、そを選択使用すべきである。或るものは讀むべく、或るものは究むべく、或るものは全く高閣に束ねて顧みざるが却て無害有益なるものがある。眼識と選擇とを以て讀みとる者は博學(learning)にはならぬとしても、多智(knowledge)となり、この多智が組織せられ、技術と方法とによつて涵養せられるとき、つねに直ちに自他の用に供せられるのである。」此處には、幾分ピントの合はぬ憾みはあるが、とにかく、

正しき史的認識に缺くことの出来ぬ主観性、——纏て主體性の問題にまで進むべき——の問題に觸れるものがある。これは明かに、前に論じた惡主観性・歪曲性・過誤性とは區別せらるべきものでなければならぬ。ポトリングブロークが、古代史に於ては、史的進展の經過や史的活動の内容や領域や、何れも全體的に纏まつて居るが、而かも吾人の經驗が充分親味に行きわたらぬ嫌ひがあると、近代史の實例は、左様な全般的見透しに缺け、例としては不完全なるを免れぬ場合が少くないけれども、而かも現代の吾人にとりては切實なる經驗が之を補つて完からしめる、となし、經驗——我等の生活體験の親疎と、歴史事實の遠近との、一種の均勢裡に史的理解を觀じようとする傾向あるは (Letter II.) 以下に述べる所と相俟つて、叙上の正しき歴史に避け得られぬ主観性を意識せることを證するものである。彼は、歴史の理解・味得にも深淺高低種々の度合ある旨を、人の年齢・經驗・才識の如何によつて考へ、モンテイヌの言を引いて、「恰かもそのやうに、同一人にして同一の書から、その二十五歳の時に讀みとらざりしものを五十歳にして讀みとり得る場合がある。少くも余は、自身の經驗により、度々遭逢した所である。」(Letter V.) と云つて居る。更に又、歴史研究の實際に於て、我等の生命能力は限りあるものなれば、「吾人の歴史研究を、殆ど全く吾人の職業に直接關係ある歴史に限るか、又は吾人の屬する社會の地位境遇に直接關係ある歴史に限るべきこと」を推稱するのである。而かも亦、「史上、吾人の生死すべき此の世紀ほど、偉大な光景を以て開始せられた世紀は、未だ曾て存しない

であらう。他と比較して見よ、最も高名なる世紀と比較してさへ、かく思はるゝに違ひない。」(Ueber
I. A Plan for General History of Europe.) 必ずしも客觀的過去自體の實在を否定するのではない。只、
過去の現前は、現在の我が生を離れては考へ得られぬといふ途を辿るのである。ボーリングブローク
の認識に關する經驗主義は、推究すれば、此處にも當て嵌まる筈である。併し、彼は勿論左様な議論
に進まうとしてはゐない。問題は、歴史も亦、歴史事實といふ一種の現實なる經驗から始まり、その
經驗の集積の仕方は色々あり得るが、眞に生きたる統一はその經驗の裡に於て、實踐行動の生に最も
適はしく選擇されるものに限るといふ點に止まる。唯、そこに後の學者によつて展開せらるべき歴史
哲學の中心問題の萌芽が、鮮かに芽生へつつあることを見落すべきでないといふのである。

上述の如き立場から彼はその對象を決定した。「歴史學修論」に於ける、至つて簡約乍ら比較的纏ま
りたる歐洲史概觀は、謂はゞ近世歐洲政局史とも呼ぶべきものである。「第十五世紀末は、自分の立場
から、第十八世紀人に適はしく、又西歐人に適はしき時代區分點であると思ふ。」宗教改革、印刷術の
發明、市民政府の發達、等を見た第十六世紀を以て、近世史の本舞臺を始める所以である。この近世
史が、ボーリングブロークの歴史研究の先づ時代的中心たるべき次第である。次に民族的中心は、こ
れも究竟は彼自身の立場からして、英・佛・獨・西等の直接關係の最も緊密頻繁なるものに求め、波
蘭・露西亞・土耳其の如き第二次的間接的關係のものや、伊太利等の如く、佛・獨・西の關聯内に編

入するを便とするものは、特に獨立の對象として重視するに及ばない。「保持すべき歴史の絲は、つねに我等自身と同一行動の舞臺にあつて、相關する民族のものである。自國に直接關係なき事物は、貴重なる時間を費すには餘りに遠隔に過ぎるか、又は些細に過ぎる。」(Letter VI.) かくして、時空兩方面から、ボーリングブロークは、その史的對象の中心を決定した。而して、そこに史的生の具體的内容の中心として對象になるものは、斷る迄もなく、これ等時空に限らるゝ西歐人の現實的政治的行動に外ならない。歴史の對象は行動人に結晶する。既に觸れた如く、ボーリングブロークの人生は、マキアヴェリ等と等しく、力の行動・政治的生活面を中心とする。美的生活や信仰生活や仁愛の生活は、この權力的生活の猛烈強力尖銳なる突進に曳きづられ、その合間々に息づいて居る寄生的纖弱なる存在に過ぎない觀がある。少くも彼の實學的歴史學では、深く意に介する必要のないものであつた。彼が近世歐洲の政局を觀察するに當つては、「この期の歴史を悲劇や喜劇を、檢するやうに」、「先づ全體の思潮又は輿論の動向を察し、次に個々のあらゆる行動、あらゆる情景を觀」、「夫々自體に於て觀察し、次にそれ等相互關係に於て考察」しようといふ。かくして行くと、英・佛・西・獨等の主要民族の個別史が、おのづから符合一致して、そこに歐洲全體の一般史を成立せしめるといふのである。歴史の大勢と個々の波瀾、特殊個性的なるものと相互規定的全體的なるもの、體驗の親近より疎遠に及ぼす主體的統一的方法と客觀的個體研究の歸納的綜合的方法、さうした史學の理論と實際とに關す

る問題は極めて素朴なる形に於て、頗る簡單に片附げられ、一面的に押しつけられては居るが、とにかく一應解決せられて居ると謂つてよからう。

かくて近世諸期は凡そ三期に分たれ、更にその第三が二分せられる。

(一)第十五世紀より第十六世紀末に及ぶ。謂はゞ近世の開幕期。

(二)それよりピレネー條約(一六五九)若くは英國王政復古(一六六〇)に至る。

(三)それより現在に至る。更に一六八八年、英國名譽革命の年を以て、この期を前後に二小分する。

(Letter VII. VIII.)

近世歐洲諸國民史の時代區分として、たとへ、失意の英國政治家ボーリングブローックの立場を、その最尖端に露呈するとはいへ、右のものが肯定に値するか否かは、固より疑問であり、翻つてみれば、上來辿り來つた歴史論・生活論そのものが、結局、一個ボーリングブローックの主觀的なる自己辯護に墮する——假令、明確なる意圖を缺く所ありとするも——嫌ひあることゝ、畢竟不二なるものと觀られるではあるまいか。獨・西勢力中心のチャールス五世時代・フィリップ二世時代は、ピレネー條約前後より轉じて、佛王ルイ十四世時代に入る。チャールス五世の歐洲・世界政策と、ルイ十四世の歐洲・世界政策とは、幾多相似の點があるが、前者には初めから佛王フランシス一世といふ強敵あり、獨・西勢力を以てしても、國際政局に於て、ルイ十四世ほど惠まれてゐないとなす。ルイ十四世は、後に

英・和のウィリアム三世あれども、歐洲制覇には大體有利な境遇にあつた。ピレネー條約以來、佛國の擡頭に對抗する均勢主義の外交が歐洲の建前として流行することゝなつた。ボーリングプロックはかく大觀し來つて、英國の對佛主戰派の豫測の必ずしも適中せず、戰によつて佛國を屈せしめ英國を有利ならしめ得ず、地主・商人等も戰に倦んで、ユトレヒト講和の形勢を馴致せし旨を叙することを忘れない。第三期の英國名譽革命を以て二小分を試みしが如きも、トーリの黨派的關心の混入を感せしめるものなしとしない。けれども、彼のこれ等の素描を通讀するとき、なる程、既に度々觸れた如く、彼の辯解的自慰的要素の混入は、之を全く拒否することは出來ぬにしても、比較的冷靜に處し得てゐて、史論の妥當ならざるものの總てを、若くは主力を、この辯明的動機に歸することは、許さないものがある。と云はねばならぬ。對佛同盟側の強硬態度の失、戰爭繼續の愚、等を仄かして、嘗て己のとりし平和政策の必ずしも不可ならざりしことを暗示する仕方も、凡ての時勢が變つた後の眼からしたといふ點もあらうが、この歐洲史素描に於ては、反感を唆る程のものではない。寧ろ全體の調子が低弱で、凡庸であると評すべきであらう。然らば、彼の歴史に關する理論的な思想と、史實解釋叙述の實際とは、甚だしい撞着矛盾はなく、齟齬ありとすれば、それは彼の史家としての能力の誤用にあらずして薄弱若くは矮小といふ所に求むべきであるやうに思はれる。

而かも更に翻つて考へるに、ボーリングプロックの時代區分や時代相の把握や乃至史實の解釋の仕

方に、卓越透徹の獨創的見解を求め、叙述に血湧き肉躍る底の快味を探らうとするのは、或る意味に於て、恐らく最も彼自身を解せざる待遇なのではあるまいか。彼の一面は謂はるゝ如く衒學的であつたにしても、彼の多くの論著が宣傳的・敵本主義的のものであつたにしても、その實踐と認識とに對する態度は、いかにも尋常であつて、そのため却て一層淺薄と見られる恐れさへなくはない。その古ポリビウスの言ひし如く、歴史に奇を求めず、唯またあるであらう日常的なる實例を屹々と連ねるに努めたとするならば、小型ながら理論と實際との一應よく纏まりたる一箇の實學的史家を看取し得るであらう。而してこの點に於てこそ、ポーリングブロークに示現されたる英國風の著しき一斑を看取し得ると思ふのである。

(註) 以上の史學說と、ヘイコン、ホップス等の一般學問論に於ける歴史の地位とを比較して見ることは、徒爾でない。周知の如く、フランシス・レイコンは、その「Proficiency and Advancement of Learning, divine and human. Bk. II.」に於て「人の智力の三部門」(three parts of Man's Understanding) と云ふ。(一)記憶—歴史(二)想像—詩作(三)理智—哲學の三方面を大別し、之を宗教生活に言へば、(一)教會史(二)比喻(三)教理に當るとし、更に夫々を細分類して行つたが、歴史についてみると、それは自然史(更に三細分す)・世間史(Civil Hist.)・教會史・文學史等に分れ、世間史だけとつてみると、備忘録(Memorials)(Commentaries と Registers とに二細分)・完全史(Perfect Hist.)・古物學(Antiquities)に三分し、その中の完全史が、また、「時」(Time)を示す年代記(Chronicles)と、「人」(Person)を示す傳記(Lives)と、「行爲」(Action)を示す物語(Narrations or Relations)となる。ホップスは、その「Lectures on I. Of Man.」の條に於て、「(一)事實の知識—感覺及び記憶によるもの」と、「(二)因果關係の知識(Knowledge of the consequence of one affirmation to another)—推理作用によるもの」と二大

別し、前者を「絶對知」と呼び、この直接經驗を録したのが「歴史」だといふ。歴史は又自然史と世間史とに分れ、世間史が人間生活の對象とする。二大分の後者、即ち因果的知識は「條件知」であつて、即ち「科學」(Science)、之が自然哲學と政治學即ち世間哲學 (Politics, Civil Philosophy) とに二分され、夫々更に細分される。故に歴史は學に屬さない。ジョン・ロックは、その „Enquiry into human Understanding.” の學問分類の項で、自然の事物及びその關係・作用・狀態等を扱ふ自然哲學と、理性あるものとして幸福追求をなす人間の行爲を扱ふ倫理學と、知識の達成・傳道の方法に關する論理學とを擧げた。

六

ボーリングブローク子が、ヴォルテールに相當の影響を與へたといふことは、既に觸れないではなかつたが、屢々人の指示するところである。^(註一) いま史的思想の方面から、その一般的なる態度に關するものを觀れば、その重點はおのづから、歴史を以て「實例の哲學」とする啓蒙風なる立場にあると云へよう。ヴォルテールの多量且つ優秀なる史的作業は、その立場なり態度なりのみに於てさへ、ボーリングブロークのそれとは、頗る異つた要素を多分に包含する。況や歴史叙述といふ見地からすれば、兩者は比較を絶するでもあらう。只、その最も相似たる所は、如上の、死せる知識の堆積・玩弄を斥けて——これが當時の史界の大なる癩であつたことは、曩に述べた——實例による生きた知識を活用せしめようと努める點である。まことに實例による哲學とは、啓蒙主義一般の學問教養普及運動の性質をよく現はして居ると考へられる。親しみ易い會話の裡に何時しか不知不識、深遠なる哲理に通曉せしめるのが、この理想であつた。がそれはとにかく、ボーリングブロークの實例による生きた史識

と、ヴォルテールのそれとは、少しく仔細に觀ると、その成績の大小良否を別として、決して同一とは云へないのである。それは歴史の理解の仕方を通しての人生に對する態度の差に連るものと云へなくはないけれども、併し其處迄推究する必要はない。端的に言へば、政治史的と文明史的との差である。歴史の對象の中心を比較的・狭く人間の權力的・政治的行動面に注ぐか、廣く教養的・文化的乃至社會的・習俗的生活面に互らしめるか、——それは懸て單なる對象の廣狹だけに限らるゝものではなくて、歴史的方法の變改に續くべき根深い性質をもつが、——とにかく、一應此の線で兩者の異同を明かにすることが出来る。そしてこれに、對照上、一見ストア的なるボーリングブロークの史的態度と、エピキュリアンのなるヴォルテールの史的態度とが關聯する。ボーリングブロークの歴史は、ヴォルテールに比すると、狭く小さく暗く堅い。ヴォルテールの歴史は、ボーリングブロークに比すると、濶く大きく明るく豊かに華かである。——但し、これはボーリングブロークの一般的知識教養が狭小、固陋であつたといふ意味ではない。史學定立の態度をいつたのである。この點からしても、ボーリングブロークの佛蘭西啓蒙史學に寄與せし所が幾らか想見せらるゝではなからうか。かかる啓蒙史學の出發點に於て、生きたる歴史の思想に於て、ヴォルテールへの影響を認めるとしても、それが他の一般的博識的なる個々の知識教養、機智修辭の才識に於ける賞讃以上に、どれだけ深くヴォルテールに作用せしかは、遽かに斷じ難い所である。

人間を政治的動物として觀る側面から、國家的政局的生活に於て歴史の中心對象を求めた仕方では、寧ろ普王フリードリヒ二世に於て、期せずしてボーリングブロークの親近者を見出し得るかの如くである。フリードリヒ大王が、その史學に於てもヴォルテールの弟子なりしことは、周ねく知られた所であるが、併しその歴史叙述は、人間觀を通して、文化的よりか政治的であり、實例の哲學の内容も、一層現實的權力的に集約されて居る。これは主として文筆人に對する政治人の生活自體の反映に歸すべきものであらうが、そこにまた啓蒙主義の若さといふやうなものも考へられなくはない。

併し乍ら、何と言つても、ボーリングブロークの皮相・粗雜なる途を深め擴め、見違へる程に大成した正嫡は、就中この史的世界に於て、やはり英國啓蒙主義の完成者ヒュームではあるまいか。ヒューム

(註二)

の政治論等は直接的には殆どボーリングブロークの影響を蒙むるところなしと云はれる。果して然らば、その史學的思想全般に互る尠からぬ類似の途は、單なる偶然の暗合に過ぎないだらうか。勿論、ヒュームの一種の印象主義的な、所謂懷疑的經驗主義の精緻なる思索によつて縱横に追跡・反省された認識論的理論と、ボーリングブロークの粗大常識的な命題とは、嚴密な哲學的見地からすれば、同日に語らるべきものではないであらう。随つてこれ等學的反省に於ては、類似せる途と云つても、既にそこに多大の逕庭の存すること自明である。併し、その認識と行動とに關する究極の結論は、大體の基礎と共に、とにかく同一の方向を指すものであり、その人生を考へ、政治を論じ、人間を視る眼には、

共通なるもの頗る多く、就中、史的思想の場合に於ては、ヒュームが特に多くを詳論せぬ關係もあらうが、史學理論的立場に於て一層著しくその距離の遠からざるを覚えしめるものが意外に多いのである。否、その經驗尊重の相對的・實際的・現實的傾向の史學説は、深淺精粗の差ありとはいへ、全體的に觀るにつれて、一層同一型たる感を深くせしめるものがある。されば、英國經驗論の流風と、ペイコン・クラレンドンよりヒューム・ロバートソンに至る英國史風の特徴とを考へるとき、ヒュームの大なる名の前にボーリングブロークの名を、小さき文字ではあつても、加へることの當然さを認めざるを得ないのである。本篇起草の動機の主なる一は、實にこのヒュームとの相似の大なる點に興味をもつたところにある。ヒュームがボーリングブロークに負ふことの如何は、その肯定的に傾くと否定的に傾くと、何れにせよ、兩者の相似は、英國啓蒙史學の主潮からみて、極めて意義深きものと考へられる。この意味から、ギボンが受けたボーリングブローク思想について、シッケル(Walter Sichel, *Bolingbroke and his Times*, 1902. vol. II. p. 431 ff.)の如く、主として啓蒙風なる基督教的・教會史的取扱ひに關する兩者の比較に於て、詳細な推論を展開する者もあるが、かゝる宗教上對教會的啓蒙の立場は、必ずしもギボンのみを特に取り上げるに當らない點もあるのみならず、ギボンには寧ろヴォルテールの・佛蘭西的要素と稱すべきものが、その根本的態度に流れてゐて、却てヒューム・ロバートソン等よりも、ボーリングブロークから遠ざかる點のあることを見落してはなるまいと思ふ。なほこ

れ等の諸家については、他の機會にゆづり、此處には啓蒙史學の先達としてボーリングブロックを瞥見するに止めたい。

(註一) 此の點にうつて更に A. S. Hurn, *Voltaire et Bolingbroke*. 1915. 等を参考したく思つたが、入手の機を得なかつた。

(註二) Cf. W. Knight, *Hume*, 1905. P. 36.

追記

本稿は今はなき家父木又居士の病床に侍し、ついで埋骨の事に當るの傍ら草せられた。一篇の備はらざる遺憾は、一抹の感慨と共に、秋風に從つて我が心を横ぎる。(昭和十一年九月三日)